派遣者番号	R6K22	氏名	山田 豊
研究主題 —副主題—	小学校教科担任制の機能及びその影響に関する一考察 —小学校体育専科と学級担任との関係から—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	鈴木 聡
所属	立川市立第七小学校	所属長	島村 雄次郎

キーワード：教科担任制 小学校 体育 学級担任 専科教員 連携

要旨：本研究では、小学校体育の教科担任制導入が、教員にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

学級担任と体育専科教員の双方にインタビュー調査を行った。インタビューから次の2点が明らかとなった。①教科担任制の導入は、教員同士の関係だけでは難しく、組織としての取組や対応を教師は求めている。②小学校体育の教科担任制の導入が、学級担任の内省を促し、専科教員による体育授業の難しさを再認識する契機となる。

これまで、「体育授業の一部」が担任業務の一部という認識で行われてきた可能性がある。教科担任制の導入により、それらが「体育授業の一部」であることが明確になる。明確になって初めて、学級担任と体育専科教員の連携が取れた体育授業の在り方を考えることができる。教科担任制の導入が、これからの小学校体育のより良い在り方を考え、生み出すきっかけとなる可能性が示された。

小学校教科担任制の機能及びその影響に関する一考察

—小学校体育専科と学級担任との関係から—

山田 豊

1 研究の目的

現在、小学校における教科担任制の導入が進められており、学校現場からは様々な声が挙がっている。文部科学省は『小学校高学年における教科担任制に関する事例集』（2023）で、「授業の質の向上」「小・中学校間の円滑な接続」「多面的な児童理解」「教師の負担軽減」という視点から、教科担任制導入のメリットを挙げている。一方で、教育現場に目を向けると、「講師が見つからない。」「児童が落ち着かず授業が成立しない。」といった悩みを耳にする。教科担任制の導入に伴い、学校現場は小さくない影響を受けている。

教科担任制導入にあたり、優先される教科が示された。その一つが体育である。小学校の体育は、実技教科である特性を考慮し専門性の高い専科教員が行うべきであるという指摘と、学級の特性をよく知る学級担任が行うべきであるという指摘の対立がよく話題となる。優先教科となったことで、さらに、様々な視点で調査や研究が行われている。

本研究では、小学校教科担任制の機能やもたらす影響について明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

文部科学省（2021）は、教科担任制の先進的な取組事例を挙げ、その成果をまとめている。しかし、これに対し、助川（2022）は、信頼性や客観性が欠けており、証拠能力のあるデータをもとに実証的に分析・検証する必要があると述べている。

そこで、本研究では、体育を他の教師に委ねている学級担任と体育の授業を行う専科教員が、教科担任制の導入に対してそれぞれどのような意識をもっているのかについて、インタビュー調査を行った。対象者は、専科教員と学級担任の双方とした。インタビューを行う前に、3か月間、調査対象の学級の体育授業や学級担任の授業、他の専科の授業に入った。現場の日常を見た上で、半構造化インタビューを行った。解釈や考察において留意すべき点として、論理的な飛躍を生じさせないために、体育科教育学を専門とし、質的調査に精通する大学教授1名をスーパーバイザーとし、研究協力を仰いだ。

3 結果と考察

インタビューを通して、小学校体育の教科担任制導入を、学級担任と体育専科教員がそれぞれどのように捉えているのかという内面に迫った。そこから、小学校教科担任制が教員にもたらす影響について明らかにしていくことを試みた。インタビューから以下の2点が明らかになった。①教科担任制の機能や効果を十分に発揮させるには教員間の連携が重要である。しかし、教員同士の関係だけでは難しく、組織としての取組や対応を教師は求めている。②小学校体育の教科担任制の導入が、学級担任の内省を促し、専科教員による体育授業の難しさを再認識する契機となる。

①については、学級担任と専科教員、共に、それぞれ連携の難しさは感じているものの、苦勞しているという認識は強くなかった。その都度、できる範囲のことを行っており、悩みはそれほど大きくなかった。一方で、学級担任から、組織としての取組の必要性が語られた。他の教員も含めた連携、学校組織としての取組が重要だと考える教員の存在が明らか

かになった。教員間の信頼関係を保つためにも、第三者が関わることの必要性についても今後検討していく必要がある。

②については、学級担任が、自身が行ってきた体育授業や他教科の専科教員としての経験を振り返ることで「専科教員が体育授業を行うことの難しさ」を再認識したことを確認できた。認識するためには、一定の経験があり、内省できることが必要である。

インタビューを行った学級担任は、もめごとや怪我の対応、ルールの周知等、体育授業における特有の難しさや苦労に対して、それらを学級担任の仕事として認識し、対応していた。教科担任制導入により、体育だからこそその課題、難しさが浮き彫りにされたと言える。これまでは、小学校体育の一部が学級担任の業務という大きな枠組みの中に存在しており、「体育授業の一部」であることが無意識化されていた可能性が示唆された。教科担任制の導入は、体育授業を担任の業務から一度切り離すことになる。切り離されることで、今まで学級担任が行ってきたそれらの業務を、学級担任と専科教員のどちらが行うべきかという問題が生じる。学級担任は専科教員に全てを委ねるのではなく、また、専科教員は全てを背負うのではなく、両者が連携を図りながら体育授業を行うことが求められる。小学校体育の教科担任制導入は、体育授業の新たな形が創り上げられる契機と言える。

4 本研究における成果と課題

本研究では、小学校体育の専科制導入が教員に与える影響について検討した。その中で、学級担任の体育授業に対する意識の変化を見ることができた。教科担任制の導入は、小学校体育のより良い在り方を考え、生み出すきっかけとなる可能性が示唆された。

これまで、体育授業内の怪我や児童間のもめごとの対応は、当然、学級担任が行ってきた。それらの対応は、体育授業時間とは異なる時間で行うことが多々あり、「体育授業の一部」としてではなく、担任業務の一部という認識で行われてきた可能性がある。しかし、教科担任制の導入により、これまでは、体育授業の一部として意識されにくい学級担任が行ってきた行為が、一度切り離されることにより「体育授業の一部」であることが明確になる。そして、明確になって初めて、学級担任と体育専科教員の連携が取れた体育授業の在り方を考えることができる。

最後に、量的な傾向や体育専科教員の成長、他の専科教員との関係、組織としての教科担任制との向き合い方等、明らかにできていない点は本研究の限界である。今後も様々な視点から小学校教科担任制の機能やもたらす影響について検証していく必要があると考える。

5 主な引用・参考文献

助川晃洋 (2022) 小学校教科担任制度導入の経緯と課題、国士館大学教育学会教育学論叢、39、p43-52

細越淳二 (2024) 小学校体育専科教員の役割と教員養成の在り方、体育科教育学研究、40 (1)、p57-61

文部科学省 (2023) 小学校高学年における教科担任制に関する事例集 -小学校教育の活性化に繋げるために-

世取山拓平 (2024) 小学校教科担任制の機能及びその影響に関する一考察 -小学校体育専科を担う中学校教師のライフストーリーから-